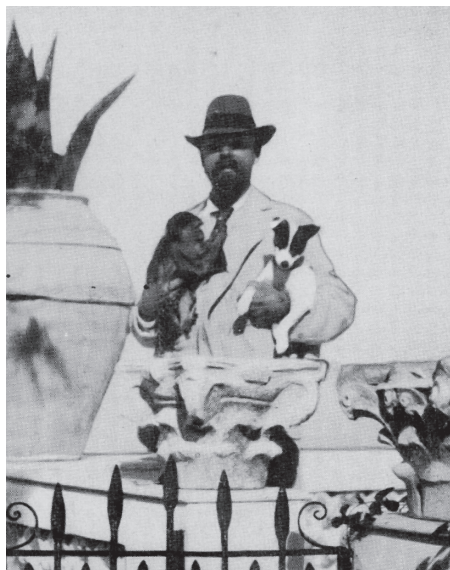


リルケとキシュとムンテと犬と

奥彩子



レップマンの伝記によれば(『リルケ全集』別巻、小島衛ほか訳、河出書房新社、1991)、リルケはアクセル・ムンテにカプリ島で会っている。1907年3月のある日のことらしい。前年の12月から島に滞在していたリルケが、アナカプリの断崖にたつムンテの別荘ヴィラ・サン・ミケーレを訪問し、案内してもらったのだという。残念ながら、いま、くわしいことはわからない。しかし、わたしの内心の思いをここに披瀝するならば、この詩人を、それまでのどんな客よりも熱烈に歓迎したのは、まず、ムンテの愛犬たちであったにちがいない。ヴィラの主人をそっちのけにして、戸口でひとしきり、犬たちとにぎやかに交歓している客人の姿を目の当たりにして、ムンテはただちに、リルケが自分と同じ種族の人間であることをさとったはずである。二人の犬好きは犬の話でおおいに盛り上がったことだろう。

このとき、リルケをむかえた犬たちがどういう種類で、何才で、名前をなんとするか、ムンテの浩瀚な伝記があれば調べてみたいところだが、いまのところはまだ、Gustaf Munthe と Gudrun Uexküll の *The Story of Axel Munthe* (London, 1953) という本も入手できていない。ところで、この本の著者のひとり、グードルーン・フォン・ユクスキュル男爵夫人は『生物から見た世界』(日高敏隆、羽田節子訳、岩波文庫、2005)の著者である、男爵ヤーコブ・フォン・ユクスキュルの妻で、この人の母がルイーゼ・フォン・シュヴェリオン、リルケの数多い庇護者のひとりであった。そして、このルイーゼの妹、アリーセ・フェンドリッ

ヒが詩人をカプリ島に招いてくれたのである。その別荘ヴィラ・ディスコポリは、アナカプリの反対、島の東南にあった。

ムンテのそばにいつも犬がいたようにリルケの眼差しはいつも犬をもとめていた。たとえば、こんな話がある。

リルケは1910年の11月末から、ひと月あまり、北アフリカを旅し、アルジェ、エル・カンタラ、チュニス、さらに、チュニスの南にある「聖都」カイルアン、「第二のメッカ」へと足をのぼした。妻のクララに宛てた手紙からは、カイルアンの街並みの幻想的な風景に気持ちをひかれている様子をうかがうことができる。しかし、この旅は、全体として、リルケの心を深く静かに満たすものではなかったようである。旅行の同伴者たちとのつながりがうまくとれなかったせいもあるが、何よりも、リルケ自身の心が北アフリカという土地と風物をうけいれることに対して、まだ十分に熟していなかったためである。その報いとして、旅は内的な必然性にとぼしい、人任せの成りゆきにおちいり、詩人は「中心と支えを失」って、自己と和解できずに、ただ「馬にひきずられている」ような状態にあった。果たして、ある日、事件がおこる。

私がチュニス南部のカイルアーンに滞在していたとき、一匹の黄色いカビール犬の犬が私に飛びかかってきて、私に噛みつきました。(生まれて初めてのことでした。私の人生において犬の態度は、私とは深い結びつきを有していたのです。)けれどもそのとき、私は、その犬は正しいのだと思ったのでした。その犬は、ただその犬なりの仕方、私がすべてにおいて完全に間違っていることを示そうとただけなのでした。(レップマン、446頁)

詩人は、つねに、野生の生き物をも歌声によって魅了したというオルペウスに憧れている。リルケもまた、みずから述べているように、犬との「深い結びつき」を大事にしてきた詩人である。いま、その犬に噛みつかれるという思いもよらない異常な出来事に遭遇して、衝撃は大きかった。その晩は、詩人としての自分に対する疑いに苦しみ、眠ることができなかつたにちがいない。反省と省察の夜。そんな闇のさなかに、遠く、犬の鳴き声が聞こえてくる。

この事件について、富士川英郎はトゥルン・ウント・タクシス侯爵夫人の『リ

ルケの思出』(養徳社、1950)に付した訳注の一つに、次のように記している。

リルケがテュニス南部のカイルアンに滞在してゐたときのことであつた。或日街上で激しい雷雨にあひ、それを避けるために一軒の家の門内に駆けこんだところ、その家の女たちは彼を侵入者と間違へて、番犬を彼に向かつてけしかけ、犬はリルケの腕に咬みついたのであつた。リルケは常に犬を愛し、彼と犬の間にはいつも不思議な了解が成立つのが例であつたがその彼に、いまカイルアンでこのやうに犬が咬みついたといふ事実のうちに、リルケは如何に自分が自分の中心から外れてしまつてゐたかを認めたといふ。ところでその日の晩、リルケが自分の部屋の寝台に臥てみると、戸外で犬の悲しげな鳴き声をした。見ると昼間彼に咬みついた犬を真中にして五匹の犬が、窓に顔を並べ、尻尾を垂れて、まるで許しでも乞ふかのやうに、彼の方を覗いてゐたのであつた…(186-187頁)

なんと、いじらしくもかわいらしい犬たちだろう。

この話の出どころを、わたしはまだ確かめていないけれど、トゥルン・ウント・タクシス侯爵夫人が「魔的」な人物と評するリルケには、いかにもふさわしいエピソードであるという気がする。大切なところは、レップマンが述べているように、この詩人にとって、「犬はつねに、その態度によって彼が歩んでいる道が正しいかどうかを教え示してくれる、コンパスの磁針のような存在」であつたということだろう。だから、リルケが反省と省察をかさねて、ようやく心の中心を取りもどし、自己との和解をなしとげたときには、犬たちとの親密な結びつきもまた、おのずと回復されたのである。

よく知られているように、リルケは『オルフォイスへのソネット』(1922)の一篇(I-16)で、犬を歌っている。旧版の『リルケ全集』第三巻(弥生書房、1973)におさめられた、富士川英郎訳を引いてみる。

友よ お前は孤独だ なぜなら…
私たちは言葉や指さすことで
おもむろに世界をわがものにしてゐる

おそらくはその最も脆弱で 危い部分を

誰が指で匂いをさし示すだろう？

だが お前は感じているのだ 私たちを脅す
力の多くを…お前は死者たちを知っている…
そして呪文に驚く

いまは私たちがいっしょに堪えしのぶときなのだ
断片や部分を それがまるで全体であるかのように
お前に力のかすのは難しかろう 何よりも

私をお前の心に植えつけないことだ 私はすぐに大きくなってしまふから
けれども私は私の主人の手をとって導き こう言うだろう
主よ これは毛皮をきたエザウです と (317-318 頁)

詩人自身が妻のクララに宛てた手紙で明らかにしたところでは、わが友 *mein Freund* と二人称の *du* で呼びかけられているものは犬である。そこで、はじめの二節が対比しているのは、人間による世界の把握と、犬による世界の把握であることがわかる。人間は言葉の世界に住んでいるが、犬は言葉をもっていない。そのため、犬は孤独な存在である。犬は、人間にはない独自の感性によって世界をとらえている。つまり、「わたしたち」と「おまえ」の世界は隔絶している。しかも、人間と犬とは、お互いの世界を共有している。それは、犬が人間の世界にあくまで関与し、避けがたい運命を「いっしょに堪えしのぶ」友であろうとするからである。詩篇は、犬のそのような献身に対する祝福である。富士川英郎の註解が引用しているリルケの手紙の一節をここにも引いておけば、「犬にあてた詩のなかで『私の主人の手』とあるのは、神の手、ここでは『オルフォイス』の手のことです。詩人はこの手を導いて、犬に、その限りない関与と献身のために、祝福を授けさせようとするのです。犬は本来は自分の手に帰することになっていない遺産、つまりその苦楽を伴った人間のすべての運命に与ろうとして、ほとんどあのエザウのように毛皮を身にまとっているのです」(同書、430 頁、エザウについては、注を参照)。

しかし、このソネットも、リルケの他の詩篇と同じく、わたしにはたいへんむずかしい。注釈を読めば、わかるというものではない。心のなかに理解がみのるまで、じっと待っているほかはないように思っている。

ここでちょっと寄り道をすれば、リルケから3年あまりのち、カイルアンを訪れ、この地で、色彩に目覚めた画家がいる。パウル・クレーである。クレーはカイルアンで記した日記(1914年4月16日)に、はっきり、こう書いている。「色は、私を永遠に捉えたのだ。私と色は一体だ」(『クレーの日記』、南原実訳、新潮社、1961)。いくつもある作品のうち、「カイルアンの城門の前で」という水彩画を見ると、蜃気楼のようなモスクの白いドームの下方に、淡い茶色を基調とする長方形のマッスが、城壁や椰子や砂丘のような円い丘やオアシスを思わせる青と茶と灰色と溶けあうようにかさなりながら、広い空間を開いている。その砂漠には、二頭の駱駝が歩いている。その後ろに、小さめの動物がもう一頭。こじつけるつもりはないが、そのユーモアにあふれた姿態は、わたしには、どうも犬に見える。たぶん驢馬だろうとは思うけれど。

さて、わたしが旧ユーゴスラヴィアの作家ダニロ・キシユの小説に心をひかれたそもそのきっかけは、『若き日の哀しみ』(山崎佳代子訳、東京創元社、1995)という短篇集で、「少年と犬」を読んだことにあった。これは三部構成の短篇で、最初は、「口をきく犬」という題のとおり、ディンゴという名の犬を一人称とする語りで、「僕」が幼くして母親から引き離されて、はじまった「犬のような」暮らし、人間とともにある暮らしの物語である。川に捨てられた妹たち(「魂に平安あれ」)、悲しみのあまりの母の死、飼い主のこと、口がきけるという特別な力を、「僕」にさずけてくれた、アンディという名の「犬のような」少年の愛。大戦後の窮乏のなか、「孤独と悲しみ」によって結びつけられた二人の愛にあつては、人と犬はもはや既定の境界に縛りつけられた存在ではなく、ディンゴは犬であつて人になり、アンディは人であつて犬になる。そして、この愛のゆえに生まれる不幸な結末。二人の別れとディンゴの死。別れの様子は、ディンゴの飼い主に宛てた、アンディの「手紙」に描かれ、ディンゴの死は、アンディに宛てた飼い主の「返信」に描かれる。巧みな構成に盛られた、そんな悲劇的な筋もさりながら、素朴な読者としてのわたしを魅了したのは、犬の語り口に滲み出ている、知性、ユーモア、抒情とペーソスにあふれた、暖かい心であつたといまにしてわかる。

キシユは、文学的手法に異常なほどこだわった作家である。一作ごとに、作風

が変わることで知られているが、「異化」は、さまざまな手法のうちでも、キシユが偏愛する手法であった。多くの作品において、筋を構成するエピソードの配置と展開が、作中の人物に対してアイロニーのこもった距離をたもつように工夫されていて、読者の一方的な感情移入は拒否されるか、きびしく制限される。『若き日の哀しみ』を含む自伝的三部作についても、同じである。だから、「少年と犬」のような素直なストーリーは、キシユの作品のなかではたいへん珍しいといえるだろう。犬と暮らしたことがある人なら、誰もが思い出さずにはいられない、犬との心の奥深くの結びつき、そして、別離に際しての胸を裂かれるような痛み。そうした感情的な素材が、ことさら回避されることなく、筋の中心にまっすぐ据えられている。ただし、童話を思わせる、犬の語りという形式を選んで。さらにまた、犬の死をめぐるのは、手紙という話し言葉ではないスタイルを採用して。ディンゴとの別離のあと、アンディは飼い主に宛てて、こんなふうには書いています。犬の死をまだ知らないままに。

この手紙をディンゴに読んでやって、僕のせいじゃなかった、どうしても連れて行ってやるわけにはいかなかった、けしておまえのことは忘れないと話してやってください。それから、僕がいつか詩人になったら、おまえのことを詩か寓話に書くつもりだということも、話してやってください。その寓話では、犬は口がきけるのです。そして、もちろん、ディンゴという名前です。お願いします、ベルキさん、そうしてやってください。ディンゴはぜんぶわかるでしょう。(146-147 頁)

こうして、「口をきく犬」という短篇は、アンディの視点から描かれているとも考えられる。詩人となったアンディが描いた寓話。そして、アンディの心のなかには、少年と犬という分ちがたい二つの魂が宿っている。二つの魂と見えるものの、それが、つまりは、キシユという作家の内奥にひそむ詩人の魂であることはいままでもない。

詩人と犬という最初的话题にもどったところで、もう一度、カプリ島のヴィラ・サン・ミケーレを訪ねてみよう。犬好きの主人、アクセル・ムンテは、1857年、スウェーデンのオスカースハムンに生まれたスウェーデン人。パリに出て、医学に志し、1880年、博士号を取得し、催眠療法で名高い神経病学者シャルコーに

も師事して、パリで開業する。持ち前のエスプリと気さくさ、そして、生き物に対する、およそ人並みはずれた愛情の深さによって、一躍、パリの庶民にも上流階級にも、名医の名を馳せることになる。ムンテは文才にも恵まれ、何冊かの著作をへて、1929年に、代表作の *The Story of San Michele* をロンドンで出版した(わたしが最初に読んだのは、久保文さんによる日本語訳である。『サン・ミケーレ物語』増補版、紀伊国屋書店、1974)。

『サン・ミケーレ物語』は自伝的な作品とされるが、著者みずからはそれを否定している。たしかに、幻想的なエピソードもあちこちにちりばめられているので、普通の意味での回想録ではないが、著者と、開業医である一人称の語り手とが大筋で一致することはいなめない。物語は、『ファウスト』の冒頭を思わせる、悪魔との契約で幕をあける。主人公がはじめてカプリ島をおとずれ、アナカプリのローマ皇帝ティベリウスの遺跡とサン・ミケーレ礼拝堂の廃墟に立ったときのこと、赤いマントに身をくるんだ神学教授を名のる人物が現れて、医者としての将来の名声と引き換えに(ただし、職業上必要な憐みの心だけは残して)、サン・ミケーレの建築の再建事業をゆだねてくれたのである。こうして、超自然的な力の助けがあって、できあがったのが、今日ミュージアムとして公開されているヴィラ・サン・ミケーレというわけである。

ムンテが、物語の主人公に軽妙な語り口で語らせるのは、人生の混沌である。コリテス(一種のヒステリー)患者の上流階級の婦人の生態であり、パリの植物園の動物舎のゴリラの死であり、娼婦たちの悲惨な生活であり、狂犬病のワクチンの開発に献身するパスツールの知られざる姿であり、コレラの流行に襲われたナポリの惨状であり…と切りがない。そして、病と不幸に苦しむ人々にまぎって、随所に出てくるのは、犬や鳥に対する、思いやりにみちたエピソードのかずかずである。いま、一つだけ紹介すれば、たとえば、こんな話がある。

「僕」が愛犬をつれて、ある伯爵の屋敷にいたとき、一人の子爵がその犬を何の理由もなく蹴り飛ばしたことがあった。犬を救助しようと、あいだに割って入ったところ、子爵にぶつかった拍子に、相手は酔いのせいもあって、床に転がってしまう。犬は内臓が破裂しており、治療のいかなく、翌朝、いのちを止めてやるほかはなかった。その午後、子爵から決闘状が届けられる。決められた日、朝もやがこめるサン・クルーの森で、「僕」は、いつもの傍若無人な態度で、巻たばこをくわえて立っている子爵と向きあった。

余裕綽々だな、と僕が思った瞬間、後ろの茂みで、コマドリが鳴きはじめた。こんな季節外れに、ちびさん、どうしたんだ、といぶかしんでいると、大佐が僕の手銃身の長いピストルを置いて、ささやいた、「低めを狙うんだぞ。」「撃て!」と鋭い声が響く。銃声が聞こえた。子爵の口からたばこが落ち、教授が駆け寄るのが見えた。

決闘に勝った証は、「僕」の帽子である。決闘のことは何も知らない家政婦がいう、「古い帽子ですわね、まあ、穴もあいていますよ、前にも、後ろにも、もうオルガン弾きにくれておやりなさい、どうして、他のお医者さまのようにシルクハットをおかぶりになりませんの、ずっと粋ですのに。」これに答えて、「僕」がいうには、「男の決め手はね、帽子じゃなくて、頭だよ。」

この問答から教訓を読み取るとすれば、文章の決め手も、修辞ではなく、「頭」であるということだろう。少なくとも、ムンテの言葉遣いには、人生の混沌にあざやかに切りこんで、真実を持ち帰ってくる知性のきらめきがある。しかも、それは心の深さに裏打ちされた知性である。『サン・ミケーレ物語』という作品の魅力は、すべてここにかかっているといえるのではないだろうか。

『サン・ミケーレ物語』のおわりは、カブリ島にひきこもって、ヴィラの建築をなすとげ、また、小鳥のかすみ網猟をやめさせるために、山を一山買い取るといった仕事のうちこむ「僕」の晩年の日々を描いている。そして、死が近づいてきたときにも、主人公のそばには、ウルフという名の犬がいる。

ウルフは僕の足もとで眠っている。昼も夜も、そばを離れようとはしなかった。ときどき眼をあけて、愛と悲しみのこもった視線を僕に向ける。僕が知ったことを、かれは知っただろうか。僕がさとしたことを、かれはさっただろうか。別れの時が近づいていることを。僕は黙って、かれの頭をなでた。何とやってやればよいのか、はじめてわからなかった。僕自身、自分に説明することのできない大いなる神秘を、どう説明してやればよいのか。

「僕」の死をまっさきに感知したのは、リルケのソネットにも歌われているよ

うに、犬のほうであった。そして、「僕」の死に、ウルフの死が続き、二つの魂は天国の門にたどり着く。「僕」は聖人たちに生前の行状を厳しく弾劾されて、震えあがっている。やさしい言葉をかけてくれるのは、犬の守護聖人セント・ロッコだけである。しかし、自分を追って、門までやって来たウルフが、「天国の門に犬だと、けがらわしい毛だものめが」と罵られたとたん、我をわすれて、抗弁する。

かれはけがらわしい毛だものなどではありません。かれも、あなたやわたしを創りたもうた、その同じ神によって創られたのです。もしわれわれのための天国があるのなら、動物たちの天国もあるにちがひありません。

しかし、動物の魂を天国に迎え入れるような考えの持ち主は、審問をつかさどる預言者モーゼと聖人たちの怒りに油をそそぐばかり。「地獄へ行け、地獄へ行け」という声はその場に響きわたる。「僕」はものをいおうとするが、声が出ない。心が凍りつき、神にも人にも捨てられたように感じる。そのとき、「最悪の事態になっても、犬のことはひきうけたよ」というセント・ロッコの言葉が耳にとどく。それは、「僕」にとって、一つの救いであったにちがひない。そして、「僕」のほうは、やさしく語りかけてくるヒバリに助けをもとめる。ヒバリが飛び立つときには、誰もが記憶のなかにしまっている風景がひろがっている。青い山並み、銀灰色のオリーブの木、深い緑のよく茂った糸杉。そう、それはリルケが「五月のある朝の追憶」(『フィレンツェだより』)と評した、フラ・アンジェリコのフレスコ画の風景である。この青い山の曲がりくねった道に、アッシジの礼拝堂の鐘が響き、小鳥の聖人、聖フランチェスコの姿が現れる。モーゼの苦々しげなつぶやき。「僕」がそれを聞いたかどうかはわからない。「僕の頭は聖フランチェスコの肩に沈んだ。僕は死んでいた、そして、そのことを知らなかった」からである。『サン・ミケーレ物語』は、こうしておわる。

さて、ここまで、犬という特別な生き物とのかかわりを軸として、リルケ、キシュ、ムンテの作品を見てきたが、もともと、それらはわたしの好みによる恣意的な選択にすぎない。にもかかわらず、それぞれの作品の色合いには、ヨーロッパの歴史の進み方が濃く影を落としているように思われてならない。ムンテは科学の世紀、19世紀の半ばに生まれた人であり、リルケはオーストリア・ハンガリー帝国の没落と第一次大戦を生き抜きながら、生の根拠をもとめた詩人であり、キ

シュは第二次大戦下に子供時代をすごした「ユダヤ人」であった。時代のちがいが犬にちがった姿形をあたえるものとすれば、犬は、いつの時代にも、人の思いをあざやかに映し出す鏡のような存在なのかもしれない。

(注)

「創世記」第 27 章に由来する。目の見えなくなった老人イサクが、長子エサウに祝福を授けようとするが、イサクの妻が自らの子供ヤコブに毛皮をつけさせ、毛深いエサウに成りすまして祝福を受けさせた、という話である。ソネットでは、エサウとヤコブの名前が取り違えられているが、リルケの勘違いか、それとも意図があったのか、確たることはわからない。

なお、『サン・ミケーレ物語』の引用は、*The Story of San Michele, Second Printing*, New York: Carroll & Graf Publishers, 1991 からの試訳である。

Rilke, Kiš, Munthe, and Dogs

The paper deals with the works of three prominent authors from different countries in Europe: the Austrian poet Rainer Maria Rilke (1875-1926), the Yugoslav writer Danilo Kiš (1935-1989), and the Swedish psychiatrist Axel Munthe (1857-1949), focusing on the relationship with their beloved dogs.

Munthe, the refounder of the church of San Michele on Capri Island, wrote a kind of autobiography in English named *The Story of San Michele*, where the readers always feel the breath of the dog who guides the protagonist's life. The same thing happens in the autobiographical work of Kiš, *Early Sorrows*, whose protagonist decides to be a poet so that he would write about his dog. Finally, in the case of Rilke, dogs play a role exactly like a compass in his life. In the works of these three authors, it might be said that the boundaries between the protagonist and dogs are ambiguous.

The different tones seen in their works reflect the historical phases of Europe. Munthe was born in the midst of the nineteenth century, an era of scientific progress. Rilke sought the meaning of existence while living through the fall of Austro-Hungarian Empire and the First World War. As a Jewish child during the Second World War, Kiš lost a quite few members of his relatives, including his father, in Nazi concentration camps. These different times mean that the dogs are portrayed differently; yet it is clear that they vividly reflect the minds of their owners in all times and places, like a mirror of our inner depths.